その他

辻堂

憩いのひとときを過ごす

備後南部の地域では、村々をつなぐ旧主要道の峠や道端、あるいは集落の辻に、お堂をよく見かけます。

この建物は、暑い夏の昼下がりには通行する旅人の休憩所となり、また村の子どもたちの遊び場や地域の人々の憩いの場など、さまざまに使われてきました。かつてこのお堂の管理や行事などは社寺とは関係なく、すべて地域の人々の共同作業として行われ、連帯の場としても大きな役割を果たしてきました。

引野天神社前の辻堂

平面は方形で4本柱を原則とし、床は板張り、周囲に壁を設けず吹き放しの簡素な建物となっており、堂の奥側に祭壇を設置して石仏などが安置されています。屋根の形は宝形造や入母屋造が多いようです。呼び方は、古くより「休み堂」「憩亭」などと呼ばれたり、「地蔵堂」などのようにまつられている仏像に由来するもの、あるいは所在する場所名の「○○の堂」などのようにさまざまです。また、市内熊野町の「六本堂」は、6本の柱が使われた変形の大きな辻堂です。

六本堂

江戸時代末期に書かれた『福山志料』という書物には「憩亭は微小なれど此国のみ多くありて、他国に稀なるもの…」と記されています。このような建物は備後南部を中心にして中国地方に点々と造られています（四国の一部地域にも同じような建物があるようです）。

建築時期を考えるにも建物が簡素なため、棟札などその建立を示す記録も少なく困難ですが、一部には江戸時代前半にさかのぼるものもあるようです。建物の由来については、福山藩主水野勝成が若いころ、諸国遍歴の途中、辻堂の便利さを体験したため、後日藩内の村々に辻堂を建てさせたとの言い伝えがありますが、これについてははっきりとした証拠は見つかっていません。

吹き放しで4本柱の辻堂は、この地方特有のもので、そこで行われている地蔵盆などの行事とともに、民俗文化財として今後いつまでも残していきたいものです。

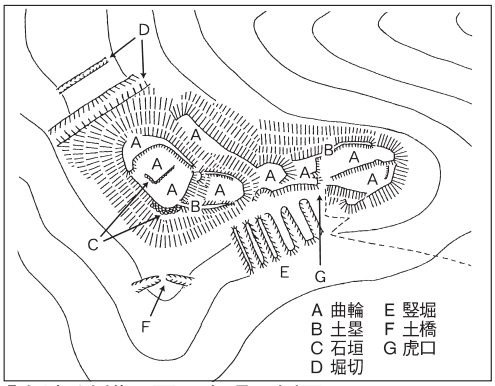
（1999年3月号に掲載）

中世の『山城』

戦国の世を伝える史跡

県内の山々には城山と呼ばれている場所が多くあり、市内だけでも70個所くらい存在しています。これらの多くは戦国時代に築かれた中世の『山城』の跡で、自然の地形を削り、あるいは盛り上げ、比較的簡単な建物を造り、『城』としていました。

当時の戦は、民衆（農民）の支援なしにはできず、農繁期には休戦することもあったようです。しかし築城には多くの民衆が駆り出され、粗末な工具による労働を強いられたものと考えられます。その痕跡も、近年の開発により次々と消滅しています。しかしこれらは、混乱の世であった戦国時代の様相の一端を示す史跡です。平和な現在だからこそ、そのあかしとして後世に残したいものです。



『山城』遺構の図面表現の例図

山城のほとんどが私有地にありますので、登られる場合には、火気の扱いや植物などを傷つけないように注意しましょう。

〈中世山城でよく使われる語句〉

○曲輪…郭とも書く。堀切やがけなどで守られた削平地で建物などがあり、生活や防戦の場所。近世城郭では、本丸、二の丸などと呼ばれた。

○虎口…小口とも書く。城の重要な出入口。各曲輪ごとの出入口のことを言う場合もある。

○堀切…尾根の方向に直交して設けた空堀。敵が尾根筋から侵入するのを防ぐためのもので、両端を竪堀とすることもある。

○竪堀…『山城』に用いられた空堀の一種。斜面からの攻撃を防ぐ施設で、等高線と直交する向きに築かれた。

○土塁…土居も同じ意味。土を盛り上げ土手状にした防御施設。

○土橋…多人数が横に並んで進めないように、尾根筋の両側を削り落として細くしたもの。また、堀切にかけた橋で、上に土をのせている。

（2001年7月号に掲載）

茅の輪くぐり

風土記の話が現在に生きる

鎌倉時代中期の学者、卜部兼方が著した『日本書紀』の注釈書『釈日本紀』に「備後国風土記逸文」が載っています。その昔、ある村に蘇民将来と巨旦将来という兄弟が住んでいました。ある時、武塔の神が旅の途中その村に立ち寄り、まず裕福な弟の巨旦に宿を求めますが断られます。次に貧しい兄の蘇民に宿を請うと、気持ちよく応じ精いっぱいのもてなしをします。翌朝、武塔の神は「我はスサノオの神である。蘇民将来とその子孫は、この村で疫病が流行しても、腰に茅の輪をつければ免れることができるだろう。」と言い残して去っていきます。その言葉通り、疫病の流行によって巨旦将来の家族は病に倒れますが、茅の輪をつけた蘇民将来の家族は病から免れました。

毎年6月30日の夏越の大祓には、各地の神社で、茅の輪くぐりの神事が多くの参拝客を集めて行われます。当日は、神社の境内に茅で作った大きな輪が据えられ、「水無月の夏越の祓する人は千歳の命延ぶといふなり」という古歌を唱えながら、左回り、右回り、左回りと八の字を描くように三度茅の輪をくぐり抜けます。これによって、災厄や疫病を祓い清めると言われています。

市内では毎年、福山八幡宮で7月30日、新市町の吉備津神社・鞆町の沼名前神社などで6月30日に、新市町の素盞嗚神社では8月8日に行われています。奈良時代に編集された『風土記』の話が、現在も年中行事として生きています。

（2008年6月号に掲載）